

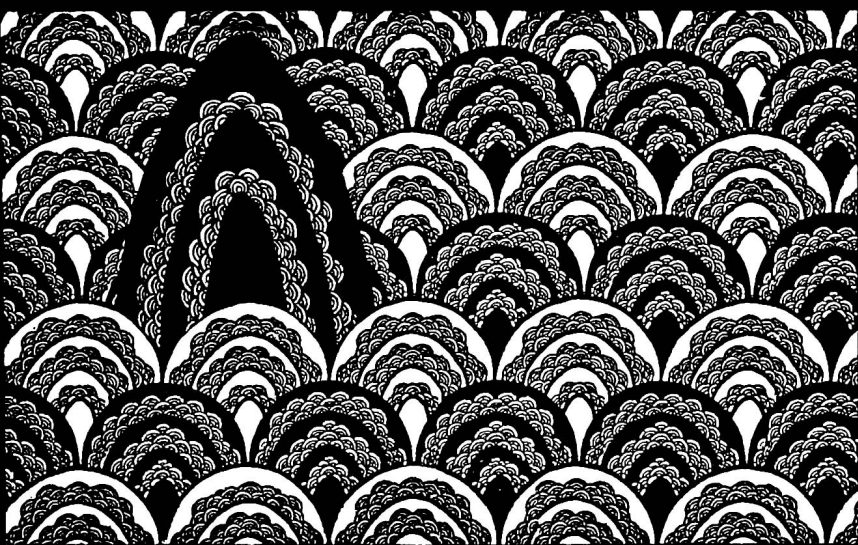
金石範

火山鳥

II

金石範
火山島
II

火山島
II
金石範



火山島Ⅱ

昭和五十八年七月十五日 第一刷

著者 金石範

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

(一〇二)東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五―一二一一

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 大日本印刷

製本 和田製本

定価 二五〇〇円

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

目次

第五章
第六章
第七章

装丁
田村義也

火山島
Ⅱ

第五章

十時、たしか十時だったな……、南承之は竹の小枝を削

ぐ手を休めてゆっくり立ち上った。別に立ち上ることはなかったのだが、何となく立ち上った。たしか有媛が城内の築港で乗る木浦行連絡船は十時だったはずだ。彼は何気ないふうには腕時計を見た。小屋の隅のランプの光は戸口に近い南承之の位置まで届きにくかったが、もう十時半に近いのは分かった。いつのまにか仕事に没頭していたのだろう。

腕時計を何気ないふうに見たというのは、目立たぬようにということだったが、それにはちよつとした理由があった。S里の叔母の家に寄宿しながら中学校の教員をしていたころだが、村の若者に、おい、おまえは日本帰りだと思つて腕時計をちらちらさせるな、気に食わん、とからまれたことがあった。南承之にしてはとんでもないいいがかりというべきだったが、しかしそのことが忘れられなかった。腕時計とはいってももうかなり古いもので、文字盤も黄色くなっている代物だった。それでも、田舎では腕時計は珍しいのであり、それを嵌めて歩くのはかなりハイカラに見えるのである。

南承之の傍で、やおら孫書房（孫さん）というような意味。貴、官職のない人の姓の下につけて呼んだ。の鉈を持った腕が上り、瞬間低いが鋭い気合といっしょに、左手に持つて地面に立てられた青竹が斜めに断ち切られた。竹の切れ端がゆっくり倒れる。小柄だが色黒の精悍な顔付きをした孫書房は、竹の切っ先を眼に近づけて満足そうににやりとしてから南承之のほうを見た。

「明字トムムは、どっかへ行くつもりかえ？」

「いいや、どっこへも行かんよ。どうかしたんか？」

「へへえ、なんでもないさ、おれはまた、明字が時間を見てるもんだから。それに何かそわそわしてるみたいだっただよ。スンシリの婆さん、そうじゃねえだか？」

「ああ、そりゃね、わたしは鬼神でもあるまいに、そんなこと分かるはずがないだろ、若いもんはそわそわすることだってあるだ。巢立ちしたばかりの若鳥みたいにな」

土製の大きな焔炉の焚き口のまえに坐つたスンシリの婆さんがいった。小学生の孫がいるから婆さん呼ばわりされるが、年齢は五十そこそだった。南承之はもう一カ月になるが、康蒙九の妻の口ききで彼女の家の小さな温突房（部屋）に泊っていた。康蒙九の妻と彼女とは又従姉妹だったので、南承之とは姻戚関係になる。スンシリの婆さんは先の焦げた棒切れで、竹の小枝や松の枯葉などを足もとに掻き集めて焚き口へ押し込んだ。焔炉の上にかげられた黒い鉄釜では胡麻油がぐらぐら沸いていた。一瞬煙を吹き上

げて火勢が強まると、勢い油のにおいがむつと胸を逆なでするようにゆったり流れる。

「明字トムムが巢立ちしたばかりの若鳥なものですか。おれの先生になつてもらうトムムだものな。何かええことがあるに違ひねえだよ」孫書房は鋭い刃を立てて切断された青竹に、包丁の刃にでも触れるように親指の腹をそつとあてながらいった。そして、へへえと剽軽に笑つて南承之のほうへ軀を向けた。「これを見てくれろ。ほうれ、こいつは鉄の刃物よりすげえ……」

南承之は青竹の切り口を人指し指の腹で触れてみて、うんと唸つた。いつものことだが、これは孫書房の会心の作といったところだろう。まるで切り口に剃刀の刃を立てたようだった。

「ほほう、また巡警^{スンギョウ}（巡査）が一人倒れるだな。それで何人目じゃ？」

スンシリ^{スンシリ}の婆さんの傍で、竹の小枝を削ぎ落して節目にヤスリをかけている尹令監^{ユンギョウ}（老人）がいった。

「……十一人ですだ」

「おう、十一人なあ……、もう竹槍が十一本もできたか」

尹令監は頑丈な首を肩のあいだに埋めてうなずいた。

「やたらと人殺しの数をかぞえるみたいな話をするでねえよ。巡警の命も人間の命じゃて……」

隣りに坐つた瘦身の老人が、長いキセルに刻みたばこを詰めながらいう。

「エヘラ、おめえはまた体裁のええことをいつてるだ。まるで奴らの廻し者みたいなことをいうでねえよ。『西北』の奴らのためにこの土地の人間がどんな目にあつてるか、おめえは知らないのか？ このまえも、わしの親戚の娘子がなあ……」

「うむ、その話なら、このまえにちゃんと聞いたるだ。

『西北』の奴らならわしも文句はない。そんな奴は十一人じゃのうて、百一人でもかまわん」

「だったら、わしの意見とおんなじだ。いったい、『西北』と警察とどこが違うのか？」

「違うだとも。警官のなかにはこの土地の者がいるし、それにちゃんとわしらのことを心得てる者もいるんだからなあ。わしの甥っ子も城内で巡警をしとるだ。警官は警官でも、ちゃんと肚に隠しとるもんがあるんだぞ。外面^{そとづら}だけ見て西瓜の赤いのは分からんというじやろ。やたらと警官殺しの話をする、わしは気分が悪くなるだ」

「おめえは人聞きの悪い話をする。だれも警官殺しの話などしていねえではないか。ただ、竹槍の数を一つ二つと……うむ、そのう、一人二人とかぞえていただけのことだ。それくらいは意気込みがなければ竹槍に魂が入るめえ。だけれど、おめえの話は分かるだ、そういえば、そうだものなあ」

「洪爺^{ホン}いさんのいうことはその通りだよ。だけれど、洪爺いさんの甥っ子のことをいうんでねえから、気を悪くしない

でほしいが、警官を信用したらひどい目に会うからね。わたしは日帝時代の昔から警官というのは嫌いなんだ。倭奴の尻にくつついて、ちゃらちや腰の剣を鳴らしながら、どんなことをしたかい。自分の国が独立したというのに、警察はおんなじことだからね。はじめのちよつとのあいだだけだったよ、よかったのは……」

「ああ、分かっているとも、それあ、だれでも知っていることだ。おめえさんは若いときから美人で氣立てもええおなごさんじゃが、こちらの分かっていることをくどくどいうのが玉に瑕じゃて……」

「ふふふふ、もう還暦も近いというのに、口は年取らないだね。うまいこというだよ……」

竹槍を造るには、まず竹の小枝を全部きれいに削いでから、一メートル半くらいの長さに斜めから切断する。その場合、切つ先と切り口の刃がともに鋭く立つように一気に切り落すのがむづかしい。よく研いだ青光りのする鉈で、地面に立てるようにして手に持った青竹を、息を殺して一瞬に断ち切るのである。一刀のもとに切断できないで竹の肉に刃を噛ませると、鉈のほうが刃こぼれすることもある。人々は、竹の棒一本だとバカにしてはいかん、こいつはわしらには鉄砲とおなじだ、敵に対する殺意をこめて鉈を振り上げると、なかなかうまい切れ味を見せるといった。しかし、これはだれもができる仕事ではない。できないというのではないが、やはりある程度腕が立たねばなら

なかった。人々は交替で竹槍造りにあたっていたが、なかでも孫書房の切り落した竹槍がいちばん鋭い刃を立てるといので評判が立った。

鉄槍とか竹槍などの製造はもともと山間部落のほうではじまったものだ。官憲の力がそのあたりまでは及ばないからである。従つて海辺の部落では、警察力の弱い、また民衆の力が強く、警官が勝手気ままに出入りできないような地域に限られて、鉄槍よりはるかに造り方が簡便な竹槍造りがはじめられたのだった。そして、数少いその地域から隣接の村やその他山岳地帯へ運ばれるのである。

いまスンシリの婆さんのまへの鉄釜では竹槍に焼きを入れるための油が沸騰しており、仕事はすでに仕上げの段階に入っていた。ここまで来るにはまず竹の伐採からはじまつて、その運搬、小枝の切り落としや節々のカンナかけ、先端に刃を立てるなどの仕事が重ねられる。洞りの要所要所には見張りがあるのはいうまでもなかった。あと一時間余りして十二時ごろになれば、老人たちは帰って行く。それからはいだりにやつて来る若者たちと居残りの者が徹夜の作業を続ける。

孫書房は靴修理屋だった。彼は暇があれば木彫りをして、近所の村人のために木を彫つて日用品を作つたりする手先の器用な若者で、竹をうまく断ち切るのも多分にそのせいもあるだろう。

それに人のいやがることでも率先してやる性だった。本

土南端のある田舎出身の彼はこの土地の人間に溶け込む努力をしていたが、その現われでもあっただろう。そこには在日朝鮮人だった南承之の気持にも似通うものがあつた。孫書房は竹槍造りで徹夜するのをいとわれない。農民相手の、つまり太陽の出没と関係の深い仕事なので朝も早かったが、そんなときは徹夜したまま靴修理の仕事をはじめ。そしていつのまにか、竹槍造りの「名人」で通るようになり、人から一目おかれるようになった。

孫書房はこの村の民衛隊の分隊長だが、分隊長にさせられたのもこの「名人」にかなりの原因があつたといえる。おかげで孫書房は竹槍造りのほうがますます忙しくなつたが、彼はいやがらずにやつた。いずれにしても孫書房は、この小屋で遅くまで睡魔を寄せつけずに武器作りをするのが好きなのだ。

南承之は立ち上つたついでに、小屋の板戸を開けて外へ出た。雨は小降りになり、風が出ていた。降ったりやんだり、まるで梅雨のような天気だ。軒下に立ち手を伸ばして掌をひろげると、雨滴が風のせいでも規則に落ちてくるのが分かる。あたりは暗く、雨脚は見えなかった。明かりといえば左手にあるこの家の母屋の裏障子戸に映えたランプの光の反射ぐらいのもので、足もとがおぼつかぬほど暗い。それでも、小屋の傍に数個ならんだ大きな醤油甕が雨に濡れているのが分かる。小屋は宋漢方医の裏庭寄りの物置小屋であつて、家の主人が村の民衛隊の武器製造場に提供し

たものだった。

風が小屋の後ろの石垣越しにひろがった竹林を海鳴りのように騒がせながら通り抜ける。しばらく耳を澄ましていると、風のあいまいに海辺のほうから、どんと響くような大きな波の音が聞こえてくる。と、竹林がふたたび風に騒ぎ、闇にまぎれた石垣のすぐ向うに海が迫ってきたような錯覚に陥つた。

明宇トムはそわそわしてゐた。いだったよ、何かええことがあるに違いねえだよ……。うむ、孫書房は察しの早い男なんだ。……明宇トムは何かええことでもあるのかえ？　きのうも孫書房はにこにこしながらいったのだ。南承之はそのとき自分の内心を見透かされたようでひやりとしたが、そんな印象を与えた自分がいやだった。いいや、何もないさ、どうしてなんだ？　う、うん、どうしたというわけではねえだが、そんな感じがおれの心のなかでするだよ……。以前より印象が明るくなつたといったのは、李芳根の妹の有媛だった。南承之は自分の心の動きがそのようなことばに反撥するのを知っていた。うむ、彼は雨滴を運ぶ夜風に吹かれながら、いやだ、いやだなど思う。温泉房で鏡を見つめたが、鏡のなかに出てくる限りの顔付きにはどここいつて変つたところがなかった。相変らず憂鬱そうな顔をしていた。癪だが、有媛にセンチメンタルな深刻さといわれた顔だった。それにもかかわらず、明るいといわれると、しっくりしないこの心はどうしたというのか。

いや、そうではない。この二、三日間の出来事で（それは日本行の決定と李有媛との再会だった）、人目につくような印象の変化が、自分の顔や態度のどこかに出ているのが許せないのだ。少くともそのように自分を持って行きたかった。

しかしこの二つの出来事が、若い彼の心を揺り動かしたのは事実だった。

三日まえの夜遅く康蒙九に叩き起こされて日本行を伝えられたとき、最初南承之は信ずることができなかった。

部屋へ上ってきた康蒙九は、ちょっと先に島党幹部会議が終ったが、そこで武装闘争に備えての資金と物資を在日島出身実業家から調達するために自分が日本へ行くことに決まり、随員として南承之が同行するのだといった。

本人の意思の確認なしに決定されたことだったが、それは問題ではない。康蒙九が代弁したことになるだろう。そんなことよりも、康蒙九の場合とはちがく、なぜ自分のような者までが同行するのか、すぐ納得がいかなかった。ようやく工作対象の一人である従兄の南承日との顔つなぎの役だと理解したとき、南承之は日本派遣の決定が実感として伝わってくるのをおぼえたのである。そこには日本に家族がいる自分に対する組織の配慮がこめられているようでありがたかった。

康蒙九が帰った後も南承之はほとんど昂奮して眠れなかった。眠りのなかにその信じがたい事実をすぐ埋めてしま

うのがもったいないような気さえした。しかも、その上にきのう城内で偶然李有媛と会えたのである。これは南承之にとつては大きなよろこびだった。その感情の動きが彼の表情のどこかに出ていたとしても、決して不思議ではなかったといわねばならない。

海鳴りの騒ぐ南承之の頭のなかで、汽笛が鳴った。いま連絡船は城内から遠くない海上を北へ向っているだろう。月も星明かりもない海からまだ町のまたたく灯が見えているに違いない。まもなく視界は全くの闇に閉ざされる。有媛が向うソウルが頭のなかにひろがった地図の上に見え、同時に日本が反対の方向に見えてきて、南承之は自分が急に彼女から引き離されてしまうような感じに陥った。

……承之さんて、もう去年とは違って私たちみたいな自由な人ではないんですものね。彼は有媛を心で繋ぎとめるように、きのう彼女と交した会話のいくつかを思い返した。……私がいま羨ましく思っている人なんだわ、そんな人と会っている気持ちって素晴らしい。これからが大変なのね。頑張っしてほしいわ、ほんとに承之さんて素晴らしいと思ってるの……。南承之はびくびくと心臓が攪ねるのをおぼえる。きのう、城内からの帰りのバスのなかでもこれらのことばを思い返しては、どれだけ胸の打ち慄えるのをおぼえたことだろう。そして、それは彼を前進させる力を持っていた。

南承之は、彼女とこんどいつ会えるだろうかと思った。

自分たちが日本から帰る予定の三月下旬、彼女は城内にいるのだろうか。もし自分たちの予定が崩れたらどうなる？ 彼は自分が彼女に惹かれるのを否定するように首を横に振った。いや、それどころじゃないぞ、武装蜂起が迫っているのだ。武力でのたたかいはじまる……、一瞬、眼のまゝに砲火が炸裂し、闇を切り開くような明るい閃光が走って消えた。砲火とかそんな重火器ではない。しかし、銃声が響き、喊声（こゑ）がひろがり、人々は武器を手にとって立ち上る……。と、風に騒ぐ竹林のなかに（眼に）竹林が見えるわけではないが、音でそう思うだけだ、鬼火のような光が一瞬揺れて消えた。ぎくりとして眼を大きく見開いた先にふたたび光って見えたのは、鬼火ではなかった。竹林の向うの丘のあたりに上っている烽火（ひかり）なのだ。たしかに烽火だった。それが竹林に遮られて見え隠れしながら、鬼火のように光っていた。

雨が小降りになったので、早速烽火が上りはじめたようだ。小屋では笑い声がしていた。ところで、明宇はどこへ行っただ？ なあに、そこいらにいるだろうて……。じゅじゅと水を弾くような音がして、竹槍の先を沸騰する油につけ、焼きを入れていられるらしい配が伝わってきた。

南承之は戸を開けて、別に珍しいことではなかったが、いま烽火が上ったと、小屋のなかに向っていった。

「ほおう、どのあたりじゃ」

尹令監がいった。

西のほうのオルム（丘）らしいと南承之がいった。うふむ、西のほうな、烽火はたくさん上っているのか？ いや、一つだと南承之は答えた。一つなら最初の烽火だ、どうれおれも見てみるだ、と孫書房が焼きの入った竹槍を地面に置いて、変形した指が大きく見える手をはたきながら小屋の外へ出た。

いま上げたばかりらしい烽火は、だんだん大きくなって真つ暗な空の一点を明るく炎で焼いていた。

「ほうれ、向うにも見えるだ」

孫書房にいわれて、竹林のある西方から島の中央の山岳地帯の連なる南のほうへ眼を向けると、途中の丘々だろう烽火が点々とまるで夜釣りに出た舟の明かりみたいに闇に浮かんでいた。雨が小降りになるのを待っていつせいに上げはじめているのである。

「アイグ、あれごらんよ、あれは山のほうじゃないか。いまごろわたしの息子が烽火の火を燃やしてるだよ」

スンシリの婆さんのちょっと誇らしげにいう声がして、いつのまにか孫書房の傍に来て立っていた。三人はしばらく山のほうで（この島で山といえは雲峯として人々の信仰の対象でもある漢翠山のことだった）明滅するいくつもの烽火をながめた。一つ、二つ、三つ、四つ……かなりの間隔で数個の火が燃えていた。二人の老人も腰を叩きながら小屋から出てきた。

烽火は今年に入ってから頻繁に上りはじめた。それは南

朝鮮だけの単独選挙を実施する目的で「国連朝鮮委員会」がソウル入りをした時期と重なるが、とくに二・七（二月七日）全国ゼネストを前後したところは毎日のように烽火が上った。

この島の村の多くは海岸から山岳地帯に至るあいだのあちこちに聳えている側火山、つまりオルムの麓に近い平地にできていて、烽火はそれらのオルムで上げられた。そしてすでに、いくつかの村では現実に警官隊と村の青年たちとのあいだに小規模の武力衝突が起こり、火縄銃、手榴弾、日本刀などが敵に対する武器になった。竹槍や鉄槍などが造り出されたのは、たたかいの群衆化とその組織化の方向を意味していたのである。

従ってオルムに上る烽火はデモだった。それは「二・七闘争」と同じく、朝鮮の分割を実施する国連朝鮮委員会に反対するデモ、南朝鮮だけの単独政府樹立に反対するデモ、米ソ両軍の同時撤退と朝鮮統一民主政府樹立を朝鮮人民に委せるというデモ、労働者や農民、人々の生活権を要求するデモ、その他のデモであった。

この烽火デモの出没は官憲の神経を悩ました。たとえば、ある警察支署の近くのオルムで烽火が上ると、警官は驚いて城内の本署へ緊急電話を入れる。ところが本署のほうでは、電話を受けているあいだにたちまちで烽火が上ったという緊急電話が入ってくるという状態で、手がつけられないくなるのだ。支署は支署で（だいたい一面（郡をいくつかに

分けた行政区域。面の下にいくつかの里がある）に一支署、警官数は十名以下だった）小人数の配備では本署からの出勤でも要請しない限りどうにもならない。しかも不案内な山のなかへ小人数の警官が入って行けるはずもなかった。警官はときには支署のまえから烽火に向って発砲するのだが、星を撃つのに等しいそれは、威嚇射撃だとしても人の笑いのものにしかない。

まもなく人々は小屋に戻ってそれぞれの仕事をはじめた。南承之は焼きの入った竹槍を五、六本ずつ荒縄でくくり、さらに籬（しほ）でくるんで縛りつけて一つの荷物にまとめ上げた。それからふたたび竹の小枝を切り落したりして青竹に手を入れる仕事を続けたが、彼はいまその仕事をするために、竹槍造りの小屋にいないといけないというのではなかった。村の民衛隊の学習会とビラのガリ切りを手伝って帰るとき、村の西洞地区分隊長の孫書房と連れになって小屋まで来たのである。

孫書房には明日履いて行くための革靴の修理をたのんでいたし（彼が何かを感じ取ったのはそのせいもあるだろう）、それに日本へ出発すれば小屋ともしばらくお別れということになる。もちろん日本行は秘密だったから、何気なく顔を出したようにして仕事を手伝っていたのだった。

南承之は中学生や老人たちまでが参加して竹槍を造っている現場にいと、妙に観念的な雑念が取れて行くような気がする。ちょっとした猥談も混えた冗談をいいながら

淡々と作業が続けられて行くそこには、自然な形でたたかいの息吹きが立ちこめていた。

たたかいはもうはじまっているのだった。武装蜂起はいわば宣戦布告であつて、人々は黙々とその準備を生活のなかに組入れてすすめていた。当然のことだが、それは竹槍造りだけに限られるものではない。食糧確保のためには女性同盟員たち（主に農民であり海女たちだが）の活動があり、また人々のカンパがあつた。

たたかいの主役はいうまでもなく青年たちで、それを支える力として家族がある。家族というよりも、大家族主義、氏族制度的な社会であるから、一門（それを「一門」とか「門中」という）といったほうがいいだろう。これらの家族が、この島の人たちは何らかの形で親戚やあるいは姻戚関係であつたりするので、さらにひろがりを持って繋がる。だから、島民たちの意思は血縁的要素からしても、息子や娘たちが目指す方向に組織されうる下地を持っていたといえるだろう。しかし、このようなたたかいの歩みのなかでも、島を出る者は絶えないのだった。

「さあ、やるだ」

孫書房が自分の足もとの切った先をつけた青竹の一本を取つて、沸騰する油釜のまえに立った。

彼はちよつと神妙な顔付きをしたが、瞬間手にした竹槍の先を油のなかへすつとつけた。そして、じゅじゅと音を立てて白い煙を吹き上げるのを見ると、すぐそれを引き

抜いた。槍先には油が廻り、油につかつて黄色く変色した部分がつややかに光る。竹槍が完全にでき上つたのだ。

孫書房はやがて竹槍の先を地面に突き立てるようにして試験をしてみる。しかしいまは鉄の刃物のように固くなっている槍先は簡単に折れたり、欠けたりしなかつた。彼はなおトン、トンと二、三度地面をつついてみる。これが昼間で、見晴らしのよい、たとえば野原のようなどころだったら、標的を造つて遠くのほうから投げてみたくなるだろう。孫書房は槍先を眼のまえに持つてきて確かめてから、布切れできれいに土を拭き取つた。これで合格ということになる。

というのは、沸騰している油にただ機械的に槍先を突っ込んで焼が入るものではないからだ。肉の薄い切った先のほうが高熱に耐えられずに焦げてしまつたりすると、そこが欠けたりして武器らしいものにはならない。孫書房は青竹の先を断ち切つて刃をつけるだけではなく、焼きを入れるコツも心得ていた。

南承之はこの村ではじめて、一本の青竹が眼のまえでたちまち竹槍に化けるのを見たとき、いい知れぬ生々しい感じに打たれて唾を飲んだ。かつて日本で軍需工場に勤労動員されていたことを思い出したが、工場での仕事にはそういった生々しさはない。ネジ一本、ベアリング一個といった部分品から造られて行く武器製造の工程は抽象的で、まだ武器という実感から遠いところに自分があることができ